

研究資料

芳崖の写生帳下

關 千 代

東京芸術大学収蔵の狩野芳崖筆写生帳類については、その一部を本誌二八六号に登載した。今回別の六点についての調査を行ったが、その概要はつきに記す通りである。

写生帳のうちその体裁が卷子装によるもの十一点、冊子装になるもの十七点である。卷子装はすべてのちに保管上施された処置であり、元来は半紙、巻紙などに描かれたスケッチ類を表装したもので、前に記した「奈良官遊地取」も同様これに該当する。冊子装は、描かれた当初から写生帳としてあり、和紙を綴じた手造りのもの、或いは市販の洋手帳などが用いられている。

本稿ではこれらのうち年紀記入のある帳、即ち「讃州道記」「真景縮図」「真景図写卷」「芳崖翁地取」の四帖「妙義山地取」「日光地取」二巻の内容について簡略な紹介と考証をほどこし、芳崖研究のささやかな資とし度い。

一

讃州道記（紙本墨画、冊子装 一三・八×四〇・二センチ）

年代的には本資料中最初期にあたる。即ち「天保十一子十二月廿日」の書入れがあり、芳崖十三才の筆になることがわかる。美濃判半紙を堅二つ折にした九枚を、紙捻で横長に綴じた帳面で、全図筆墨による速写の四国路風景が展開する。四国に渡る船中及び上陸後白峯寺より現在の鳴門市あたりまでの写生である。

画面は総体に要を得た把握と、遠近描写に鋭い観察がみられ、卓抜な技術を示している。若年の筆致にしては稍練達にすぎる感あるものの、上京前藩中で秀れた画家を認められていた事実と合わせ考慮すれば、これらの写生はそのことの証しには

かならないといえ、若描きの筆跡を知る上に貴重な一帖である。

日附としては天保十未十二年廿日より、廿三、廿四日の五日間が明記される。（なお以下鍵印は芳崖自筆の書入れを示す）

まず表紙左上方に「讃州道記」と堅書きに墨書され、右半面に鬱蒼たる樹々の繁茂する山路風景が写生され、「白峯山」「陵山」など書込みがある。さらに表紙左肩に「白峯大権現中門ノ額、後嵯峨院勅額」と二行に書かれ、つゞいて「頓証寺」なる周囲に線形のある額面が描かれる。これらのことよって、表紙の風景は現在の香川県坂出市青海町にある四国霊場の一つである真言宗白峰寺の写生であることが判る。

第2図（図版Ⅶa）は、表紙を開いての見開き全面に、前景を海景、遠景は四国の山々がパノラマ風に展開される。冒頭に「天保十一子十二月廿日船中より」とあって、「讃岐富士」を中心に「イ、山」「丸亀御城」「象頭山」「多度津」の記入があり、左端水道らしい描写をはさんで「備前」「大坂方」とあり、これらを地図上に照合すると、坂出、丸亀辺りの沖合からの写生であることが推測される。

第3図は前図より稍潤達な速写で、樹林に囲まれる白峯神社境内正面の殿舎が描かれる。堂宇の前庭には一对の燈籠と「佐近桜」「右近橋」があり、樹木にはそれぞれ「竹」「松」「イテフ」などの書込みがある。白峯寺は弘法大師の開創と伝えるが、崇徳上皇が長寛二年（一一六四）讃岐の配所に歿した際、近侍が上皇の居住された国府の殿舎を移築し、これを頓証寺殿と称したという。表の額面は即ち応永二十一年、後小松天皇奉納の勅額で、頓証寺と記される。前庭に左近の桜、右近の橋を植えたといふ、それもこの図の示す通りである。

第4図崇徳天皇白峯御陵は、白峰寺の西北に隣接するが、こゝではこの御陵への門と境内が描かれる。

第5図は御陵で、繁茂する樹林に囲まれた広い墓域と、御陵の図である。「崇徳陵」「為義墓」「為朝墓」など書込まれる。

第6図、松樹繁る墓所が粗い筆致で描かれ、中央「佐藤忠信墓」、右方「大夫黒馬埋処」とあり、「寛永癸未仲夏上流建之」と記入される。

第7図、再び見開きのパノラマ風写生が展開される。「十二月廿三日」とあり、

ある坂元にあつての写生である。画面中央の「此辺日ノ出」の書込みにより、東に向つて写生されていることも判然とする。

第10図、前図と大凡そ同位置より逆の方向に視線が向けられている。画面は前図同様海上の風景にしながらも、構図的には前図と全く逆で、左端に海浜の展がりを描く。画面中央の遠景に小豆島を望む景が展開され、中央「讃州小豆島」左方「生駒城アト」「引田」、右端「讃州江島」「松島」などの記入があり、前図において左端に位置した松島がこゝでは右端になっている。ついで

第11図は、海上風景で、「大下山より鳴門見ル」とあり、広漠たる大海原を俯瞰しての鳴門の渦潮をかいていて、左方遠景に「紀州」とある。最後の

第12図は、潮騒ぐ鳴門の渦潮を前図より稍近くに把えている。本図をもって「讃州道記」と名付けられる旅の写生帳は終っている。

二

「芳崖翁地取」(紙本墨画・一部着色、冊子装 一一・三×一七・八センチ)

美濃紙四十五枚を横に綴じてあり、濃緑色の表紙が付けられる。表紙の左肩に「芳崖翁地取」と墨書されるが、当然のちに整理上記した上書である。

年代は、写生帖の随所に年紀が入れられて居り、嘉永三年三月から同五年一月にわたる二年間における芳崖自筆の書込みがみられる。即ち、弘化三年長府より藩留学生として、木挽町勝川院に入門後数年を経た頃のもので、写生は整然たる順序もなく、随時随所における日常身辺的なスケッチである。

内容は、冒頭江戸桜花の名所として著名な飛鳥山の花見風景にはじまる。ついで池上本門寺、山王の森、虎ノ門など江戸市中の各所を写生している。そのほか縮図、雉子、鴨など鳥類、草花など、日常目に触れた対象物を九十頁にわたり埋めている。

写生帖の各図は、粗、密必ずしも一様ではなく、完成度の高い緻密な描写から未完のスケッチなど様々である。そして、こゝには勝川院画塾における粉本主義には遠く、若い芳崖の自由な筆力が冴えて活々と示される。つぎに写生帖の内容を順を追って簡略に述べておく。

挿図1 芳崖翁地取 飛鳥山の図 東京芸術大学蔵

海上風景を前景にし、稍右寄りに屋島を中心に瀬戸海の島々が点々と遠望される。右端には屋島に隣して「八栗、五劍山」「壇ノ浦」「八嶋」など書入れられる。画面の構図から推して、最初の「十二月二十日船中より」の三日後になり、高松近郊の稍高所よりの展望で、海上に浮ぶ美しい小島の数々が描写される。

第8図、一頁の紙面半分を使い、山脈を背景に松林中に望む高松城が速写によつて書留められる。

第9図、画面右端海浜と岬が大きく延びて海上風景と遙かに点在する瀬戸の小

島が描かれる。画面には「十二月廿四日暁」「讃岐坂本より写」「此山阿州讃州サカイメ」「此山手前ヨリ大坂越ニノボル」などの書入れがあり、香川、徳島の県境に

挿図2 芳崖翁地取 飛鳥山の図 東京芸術大学蔵

第1図―6図(挿図1、2)は、前述のようにいずれも桜花の飛鳥山風景或いは山からの展望で、花や下草に淡紅や緑などわずかに色彩を刷きながらも、全体的には墨痕鮮やかな、切れ味よい筆さばきを見せている。樹間には敷毛氈も展げられ、道行く人馬の点景も楽しげで、こゝでは極めて素直な観照が示される。

「飛鳥山之図」「飛鳥山より見ル」「嘉永三戊年三月五日地取之」などの書込みにより、写生の時期、場所などは明確である。また「海老屋」「扇屋」「此森王子権現(同稱荷)などの記入もある(図版VIIb)ので、一応古地図との照合も試みてみた。

「嘉永七寅歳新刻尾張屋情七板」なる古地図によると、飛鳥山周辺には茶屋、料亭多シの文字が記入され、花見客で賑わったこの地域の往時をしる。なお余事ながら海老屋、扇屋の名もこの古図には特別名示されているが、両舗とも近年まで在り、扇屋は国鉄王子駅近くに現存する。

芳崖の写生は、この古い地図と全く符合しているので、写生の地点も大凡その見当がつき興深い。

第7―9図、池上本門寺境内の殿舎を多数写生している。「池上本門寺」「本堂」「鐘楼堂」「香炉」「鐘堂」「山門」「シヤリ堂」など。

第10図、蟋蟀の生態五図が描かれる。

第11―24図、町並と岸辺の風景で、「遠ク山王様」「虎ノ門内藤様」など書かれ、舟中から写生の趣がある。

第25―26図、山水縮図。「倣郭河陽筆、文晁」「二幅対」「かえい辛亥八月十五日地取」「倣劉松年筆意文晁」などとあるので、中国画家の作品を文晁が模写したものを、さらに縮図にしていることが分る。

第27―29図、鳥の足の部分、及雉子を着色による密画で描いている。「嘉永五年壬子正月六日写生之」

第30―34図、小鴨を比較的密画で写生し、彩色をしている。「嘉永四辛亥十二月廿七日地取」「嘉永四辛亥秋九月十五日地取」

第35図―48図、この間第40図で猫を描くほか、殆ど七月から八月にかけての草花の写生をしている。書込みに「嘉永四年辛亥八月十五日」とあるので、旧歴を現在の歴に直せば約一ヶ月の遅れなので、この頃美しく一斎に咲き出す初秋の草ばなを

つぎつぎに写生していて、芳崖の優しい心情の一端を覗かせる。

また花々を写生した場所は、「日ヶ久保御屋敷にて」と書入れがあるので、毛利家上屋敷が麻布日ヶ窪にあったところから、恐らく藩邸での取材と思われる。

第49―51図、図は七夕の飾り付けを描いている(挿図3)。彫刻の施された脚付の大きな塗り物のお供え台には瓜や果物が並べられ、二台置かれたそのお供え台は一面の一絃琴が差し渡され、両の台が結ばれている。台の前には香も焚かれ、七夕の飾り付けとしては極めて格調高い優雅なもので、勝川院画塾あるいは大名屋敷あたりでの七夕行事と考えられる。

このほか巻末までには未完の朝顔と、入念に写生されたなでしこの写生がある。傍に「浜なでしこ」嘉永辛亥夏六月七日写之」とあり、この写生帳は終わっている。

三

真景縮図(紙本墨画、冊子装 一三・七×

二一・五センチ)芳崖は勝川院画塾に入門後十年を経た安政四年春、郷里長府に帰

省するが、表紙に「真景縮図」と墨書されるこの写生帳は、この道中に描き遺されたいはゞ絵日記に類するものである。この旅行の立出に際しては、朋友橋本雅邦が内藤新宿まで見送ったとのことがよく知られているが、その旅程表によると甲州街

道から木曾路を經由して大津に至っている。

写生帳は二枚折和紙二十三枚が綴じられ、表紙に「安政四丁巳五月十七日作」「真景縮図」「狩野勝海藤氏」と、芳崖自筆と認められる表書きが三行に書かれる。反対の面には別の手で「安政四年、歳次丁巳、五月十有、五日作」と四行に記され、つづいて翠庵と認められる。翠庵号は、南画風の作品に用いられているが、この写生帳もその表現は殆ど南画風の傾向を帯びていて、後に整理のため附されたと思う翠庵の表書きは妥当な所置といえよう。

その内容は、まず「安政四年歳次云々」と書かれる表紙を開くと、冒頭つぎのような旅の日程表が記される。

二月廿五日	府中	三日	広瀬
廿六日	小原	四日	大久手
廿七日	猿橋	五日	鶉沼
廿八日	石和宿	六日	赤坂
廿九日	台ヶ原	七日	馬(番)場
卅日	上諏訪	八日	むさ(武佐)
朔日	松嵐	九日	大津
二日	大島		

それぞれの地名は甲州街道、木曾路沿いの宿場町なので、恐らく宿泊地を書留めたものであろう。この日程によると芳崖は、甲州街道を西へ進み、下諏訪から伊那、飯田の脇道を経て妻籠で中仙道に合流するよう予定されている。

しかし写生の地点をたどると、実際には予定の脇道を経ずして、塩尻から福島を經由しての本街道を往っている。

江戸から大津までの行程は、当時東海道が最短距離で百廿二里余、中仙道が百廿二里余となっている。芳崖は甲州街道經由なので百卅里余となるが、敢えて迂廻しての旅程は、当然画家としての取材をかねての事であらう。ともあれ一日の行程は平均九里程となり、芳崖は大層な健脚であったことになる。

描かれた写生は、このようなきつい日程の間に出来たものらしく、簡略な速写が多く、中にはまとももなく筆を走らせたにすぎない未完の画面も多い。そして、

その欠を補うためか心覚えのメモが画面の中に多数書込まれている。

第1図(図版Ⅷa)写生の最初は、重畳たる山なみに囲まれた関所のある風景で、「駒木の関」「江戸の方ヨリ見ル」と書込みのあるところから、江戸を出て甲州街道における最初の関所である駒木野の関とその周辺の山々であることが分る。遙か遠方に小さく「小仏峠」とあり、今夜の宿泊地小原に至るまでには、この小仏峠越もある筈である。

第2図、つぎの頁には「小仏峠ヨリ見ル江戸の方ヲ」「山上茶屋アリ」「是ヨリ相州」などの書入れがあつて、気急わしげに筆を走らせた山なみの速写が示される。

第3図、写生はこのあと人家と山島を右手前に、遠景には、大きく富士の聳える風景で「郡内」と大きく記される。郡内は、山梨県東部、南北都留郡の称で、専ら羽織裏地として用いられた絹織物海気の産地として著名な土地である。

第4図、稍高所より甲府盆地をパノラマ風に捉えている。正面遠景に富士を小さく、手前に甲府の町並、中程「石和」、遠く「栗原」「勝沼」など書入れられる速写である。盆地の中央を流れる川には「此川藤川(富士川)の上也此方川水多ハゲシ」など記される。

第5図、右頁に「ヤツガ嶽」とあり、クロッキー風の山なみが描かれる。

第6図、書込みに「甲州ヨリ上ノスハへ通ル風影(景)」とあり、右手ハケ嶽を中心とその山麓と左方駒ヶ岳を遠望する図で描かれる。右方遠く「ヤツガ嶽」とその山麓、左方遠く「駒ヶ嶽」、「地藏山」など記される。

第7図、湖面を近景に、「上諏訪」の町を左手にみての写生である。

第8図、前図と同じく湖面の風景で、右手に田園を、塩尻峠をその奥に望んでの諏訪湖風景を描く。

第9図、「鐘ヶ嶽ノ全図至而高山ナリ」と書込まれ、恐らく塩尻峠から北アルプスを遠望しての写生と思われるが、図は未完である。

第10図、「塩尻峠ヨリ見ル」「飛弾鐘ヶ嶽ノリクヲ」とあり、山なみの速写が示される。

第11図、「塩尻峠ノ峯ヨリ見ル」とあり、富士を正面に遠望し、諏訪盆地と諏訪湖が俯瞰的に捉えられている。

第12図、「寝ざめの里、寢覚の寺よりのぞみ見ル」と、ある。当時の旅行案内書ともいべき『新版諸国道中細見記(文政二年夏)』によれば、「寢覚山臨泉寺という寺より下を見おろすと絶景なり。大岩十間、小岩四十間ばかり高き所に弁天の社ある。その一段ひくき所を寝ざめの床といふ。種々名石名木ある。」とあり、寝ざめの床は天下の絶景として昔から有名であった。

第13図、この図もまた「寢覚之里より見ル」とあり、「なめ川橋」のかゝる木曾川の流れを中心に、山間風景を大捉みに、南画風に描写している。

第14図、「立町ヨリ見ル」と記され、木曾川沿いの山畑風景を粗略な筆致で描いている。立町は寢覚の里のある上ヶ松あがまつの一部落である。

第15図、この図もまた南画風に大きくデフォルメされた山と、その谷間いを流れる木曾川及びその山道が速写ながら、一種の風趣を漂わせ注目される。

第16図、「三との(三富野)手前より見ル」とあり、重なる山の端を背景に、木曾川の流れと松林などを描く。松の描写も飄逸で略画ながら趣致深い。なお三富野は妻籠の一つ手前の宿駅である。「此辺ニテ初て花ヲ見ル、日かん桜、桃、つゝじ、山吹咲」などの書込があり、早春の旅情がほのかに漂う。

第17図、「美濃路より木曾を見ル」とあり、左手遠く雪を破る木曾御嶽山を描いて「雪、木曾御嶽山木曾第一之高山」など記される。美濃は馬籠より先になるが前述の図会にもこの辺りについてつぎのように記している。

「此の先き馬籠峠より東木曾路なり。贄川まで廿一里が間、水南へ流る。棧、川、山御坂等古詠多し。木曾路の山中は谷中せまきゆえ、田畑まれにして村里少なし。(中略)山中に桜花多し。山にも桃、紅梅あり。三月末頃、皆一時に花開く。」とあり、前図の芳崖の目に止った花々も、これにつゞくものなのであろう。

第18図、「美濃の図にて尾張路」とあり、兩岸共山迫る木曾川を川上から描いている。「此辺兩岸岩山なり」とあり、又右岸崖の途中に「岩屋観音」の文字がみられる。岩屋観音は大田在かち山にあり、図会には『勝山窟観音・木曾川の西傍にあり大岩の中に石像の観世音を安置し、傍より清水流れ出づ。此のあたりの風色いちじろしくして、岩石崔嵬(さいくわい)なり。他境にすぐれて奇絶の所なり。』とある。

第19図、川上からみた木曾川の景観で、左川下に「犬山城」を、右手遠方に「宇

ぬま宿(鶴沼宿)と記される。美濃太田を出て、鶴沼宿に至る途中の写生で、本図と第20図の間にはつぎのようなメモが書き込まれている。

「大垣へ赤坂へたるいへ関ヶ原 伏見より六ノ渡しを越左へ下ル 太田大垣の城見て へ高田 大黒屋にて船 笠松ニツク 笠松より鳴方上り いらさきへ 甲府より 三里十九丁 ④台ヶ原へ 四里 八丁」

第20図(図版Ⅷb)、石山寺より琵琶湖を望む図で、こゝではこれまでの草書体でもいべき写生に対して、画面は構成的な諸書体の密画になっている。左手前面下方には「石山」とあり、叡山を背景に石山寺多宝塔、月見堂などを描き、正面中景には瀬田橋がかゝり、対岸には比羅山が望まれる。湖面には多数の釣舟が浮かび、遠い山の端には雁の群れがわたってゆく。という閑雅な風景が、鋭く深味のある表現で展開される。

「矢走」「賢田」「唐崎」「淡津(粟津)」「比羅」「瀬田橋」「叡山」「三井寺石山之後而不見」などの書込があり、芳崖は近江八景を念頭に置いていた節が窺える。或いはこの一図は、八景の一図を意図しての写生であつたかもしれない。ともあれ青年芳崖の技量を示す一齣といえよう。

最後の見開きは、「遠而伊吹山」「三上山」「此辺百笠山」等の書入れある山なみの速写で、未完である。この写生帳はこゝで終る。

四

真景図写巻(紙本墨画、冊子装 一三・七×二一・八センチ)

この写生帳は和紙廿四枚が綴じられ、滋味ある墨筆により琵琶湖風景が展開されているので、同寸の本帳は恐らく年紀は欠くものゝ、「真景縮図」につゞくものと考えて間違いないであろう。なお表紙の表題はのちの書込と思われる。量感を大胆に捉えたクロッキー程度の写生ながら、山々の重厚な描写や、飄々たる趣致ある樹木の描写など、若い芳崖の技量を知り得る貴重な資料である。

なおこの写生帳にも翠庵号が記されるが、「真景縮図」における裏面の墨書同様、後年書留められたものと思われる。

写生帳の内容はつぎの通りである。

第1図 石山寺の遠望と、鐘が大きくクローズアップで描かれる速写による写生である。

第2図 「比羅」遠望の速写。

第3図 伊吹山を遠望しての琵琶湖の湖面を大きく入れる。左「賢田」右方「美濃路」の書入れがある。

第4図 湖南より東方を望む図

第5図 石山寺の月見堂、大日堂各堂宇を描く。

第6図 月見堂より瀬田橋をとおして、比羅を遠望、琵琶湖を描く。

中央「月見堂より見ル」とあり左方「兼平古跡」「アハツ」「叡山」などの書入れがあり、左手「矢バセ」「七条ヶ嶋」「此ツ、キニ伊吹山アリ」「長命寺」「山島也」など。

第7図 湖面を中心に湖畔の速写である。

第8図 石山寺の対岸よりゆたかな瀬田川の川面を前面に月見堂、瀬田橋を遠望しての景。

第9図 未完の略画遠景に「比羅山」

第10図 近景を湖面に対岸の山なみを描いている。遠く左方「三上山」「伊吹山」「長命寺」中央「百足山」、右方「シガラキ」「ハンドフジ山」「タナカミ山」

第11図 前面湖畔で対岸の山々をかく。

右方「石山」と瀬田橋をかく。中央「タナカミ」「甲シン山」

第12図 前図同様近景は湖水の展がり、対岸の山なみ、松林をかく。左方「石山」つづいて「セ、山」「アハツ」「松間十八丁」「下屋敷」などの書入れがある。

第13図 同じく対岸風景で、「セ、ノ山」「叡山」を背景に林間に立並ぶ豪壮な殿舎の結構が描かれる。

第14図 叡山を中央遠景に、湖面を描いたもので、左

「三月大津越」右「志賀郡跡」「賢田ヨリ大津迄ヲ志賀ノ郡」など記される。

第15図 「比羅」を左端に「カタ、」の書込ある遠山で、手前の湖面が展がる速写風景である。

以下九頁分は写生帳反対面より使用されていて、宇治万福寺を訪れ、同寺山門、天王殿塔中、其他関心ある扁額等を書き記している。

五

妙義山地取 三巻本 妙義山地取は芳崖が明治二十年春狩野友信、岡不崩、岡倉秋水、本多天城らと妙義山に写生旅行を行った際のスケッチで、現在巻紙の料紙に描きとめられた各図を集成し、三巻の卷子装に仕立てられている。

各図は、「奈良官遊地取」同様一図毎に筆線で区切られ、つぎの図にすゝむという具合に、対象物は一応旅程に従って展開されてゆく。全巻殆ど妙義山及行程周辺の山嶽風景で、濃く柔い鉛筆で描写

挿図4 妙義山地取 I 石門の図 東京芸術大学蔵

挿図5 妙義山地取 I 一ノ石門の図 東京芸術大学蔵

され、随所にメモ様の書込みが記入されている。この書入れ文字や、描かれたスケッチによって、芳崖らの一行の旅程はほぼ推定されるが、その順序と各巻に整理されたスケッチの順序とは、必ずしも一致していない。

東京芸術大学に収められた当初の状況は、恐らくスケッチされた巻紙の断片が、混然と未整理の状態にあったものと思われるが、それらの図様の連続を考慮して表装したものであろう。しかしいづれも山嶽風景で、画面は一見よく類似しているところから、図柄による按配では、その配列は難しい。たゞ旅程にしたがっての写生であることは確かなので、一応その行程を追ってみよう。

一行の行程は、現在と変らず目的地の妙義山迄は信越線によっている。奇勝妙義を探索した一行は、荒船山山麓を経て軽井沢に至り、さらに軽井沢から碓氷峠を越え、信越線の終点横川駅で、鉄道により帰京している。

各巻図様の大要と、書込みはつぎの通り。

○妙義山地取Ⅰ（紙本鉛筆・一部色鉛筆 一六・三×一四八九・三センチ）この巻は三巻中最も長尺で、大雑束に二つのブロックから成る。冒頭巨大な石門のスケッチ（挿図4）が貼られるが、つぎの画面からは石門とは別の時点に描かれた一連が継がれている。即ちこの一連のスケッチは、スケジュールからいえば帰路に当る部分になる。山嶽遠望図には、「飯塚ヨリ見ル」とあり、飯塚は現在の北高崎駅で、高崎から下り最初の駅からの写生であることが分る。

これにつづく別の画面では、同じく山嶽遠望で、画面には「磯辺ヨリ、東京江向帰ルニ望」とあり、又別の図には妙義山の連峰を正面に「磯辺ヨリ見ル、安中ステーションより見ル、安中駅」等のメモが記される。

この辺りは、当然往路も通過している筈だが「東京江帰ル而望」との書入れは帰路の写生であることを明確にしている。したがって、この一連は筆線に区切られる同一紙なので、この巻の前半は帰り途のスケッチと考えて然るべきであろう。

さてこれにつづく一連は、山間風景の数齣や、和歌「うつくしくあやにたへなりかみろきの神の作れるこれの美山は」を書留めた一段のつぎに、目的地である妙義山の奇峰がスケッチされる。書入れに「一ノ石門、二ノ石門、四ノ石門ノ岩ヨリ取ル、上ニ登リ写ス、タイナイク、リ、風突籠ノ中ニテ形転ズ不問」（挿図5）などあ

り、かなり高所まで登攀しており、また駕籠を利用していることもわかる。

巻末には、知合の蒐集家の家にも立寄ったものか、土器など出土品の写生に添えて「上野国北甘菜郡妙義町三番地白井幸次郎」なるメモものこされる。

このように、妙義山地取Ⅰでは画巻の後半に往路が表装されているが、この部分は当然最初になければならない画面なのである。

○妙義山地取Ⅱ（紙本鉛筆・一部色鉛筆・淡彩 一六・四×六三四・六センチ）

この巻は、八齣程の画面に妙義山から荒船山々腹を経由して軽井沢に至る写生と、軽井沢より碓氷峠越えの山嶽風景を描いている。

冒頭中景に巨嶽と、遠景にも巨峰が聳え、「中ノ嶽」とメモされ、前記巨嶽には「ツ、ミガ嶽」と記される（図版IX a）。

つづく四齣は妙義山をはなれ、軽井沢に向う山嶽地帯のスケッチで、山は雪に掩われ、遠く聳える浅間山は噴煙を吐いている。書込みには「廿七日朝カレイザワヨリ碓氷峠登ル」、この道中の景色及びこゝよりの展望を数齣描いている。書入れには「白井峠手前青里ニ而」「廿七日午後二時二十分、碓氷峠ヨリ妙義裏」「碓氷峠ヨリ見ル」などある。

○妙義仏界地取（紙本鉛筆・一部色鉛筆・淡彩 二八・七×一一九一・一センチ）

表題の仏界に該当する描写は見当らず、旅程のうちの最終コースである碓氷峠越えが第Ⅱの巻につづいて描かれる。

「廿七日午前、クリガ原山」「山道ヨリ見ル妙義山」「前日井川」などの文字が記入され、軽井沢から横川に至る山道が、周囲の展望を混えて十数齣描かれる。

旅行のコースに従っての写生順序としては、このあと「妙義山地取Ⅰ」の前半に描かれた部分、即ち横川駅から高崎駅に至る鉄道沿線の風景スケッチが連続することになる。

なお、妙義山地取三巻中その年紀については、廿六日、廿七日の日附は見られるものの年月についての記載は示されていない。明治二十年というのは、のちに岡不崩、高谷肖哲等門弟たちの記録によるもので、信越線開通年次の明治十八年十月を考慮すれば、両門弟の記す春は芳崖の歿した明治二十一年十一月までに、十九年以降三回となる。十九年は天心らの奈良古美術調査に参加しているので、二十年、二

十一年の春ということに限定され、両氏の記述に誤りないこととしてよいように思われる。たゞ月に關しては不崩三月、肖哲四月のずれがあり、写生中残雪らしい描写をみるもの、いづれとも詳らかにし難い。

因みに、本旅行に際して芳崖は妙義山神社収藏品「地藏菩薩靈現記」絵巻（現重要文化財）の模写を行って居り、その模写本は現在東京芸術大学に蔵される。

六

日光地取 二巻本

この巻も、画面は巻紙に筆線で劃線を引き、つぎの図にすゝむという遣り方がとられている。

図は東照宮から中禅寺湖に至る間の、風景、特に多くの滝、建造物、什器等が二巻本に貼り込まれている。順序は「妙義山地取」と同じく断片をのちに整理し並べたもので、日附の前後する部分などもあって、実際の行程とは合致していない。

日光までの交通の便は、鉄道は明治二十三年に敷設され、東武電鉄は昭和に入ってからなので、芳崖の日光行はやはり駕籠や馬によったものであろう。

年代については第二巻に月日の書込みはあるものの年代は詳らかにしない。日光はフェノロサも度々訪れている地なので、或いは同行したことも考え得るが、年代の設定はのちの研究に俟ちたい。

第一巻 (紙本鉛筆・一部色鉛筆 三〇・五×五七八・四センチ)

第1図 大燈籠が描かれ、灯りの入る部分に「天人」と書込まれる。燈籠の形と、天人のレリーフに注目しての写生であろう。

第2図 一本の柱よりの柱頭に裝飾が施こされ、その部分に重点を置いて写生したもので、仏具に似るが速写なので、実態を知るに困難である。

第3図(挿図6) 画中「霧降水遊図」との書込があり、滝の中で水浴する二人の人物が描かれる。

第4図 前図につづいて溪間を流れる滝の図で、「卅日朝沢滝」とある。

第5図 二荒山を中心に小倉山、マナゴ山等の連山を、霧降方面或いはその反対方向よりパノラマ風に写生している。

第6図 この画面は、筆線でなく別紙が継ぎ合わされ、前図に引きつづいて描かれてはいない。主題も滝ではなく、手の混んだ裝飾的門と、狗犬一对、階段などがクロッキー風に描かれる。

第7図 多宝塔と同塔塔上の裝飾が描かれる。

第8図 この巻最後の図は、「八角堂ノ内ニ在リ」「阿蘭陀」とあって、曲線により裝飾された燭台が二基と、前図門前に描かれた狗犬一对が稍町噺に描かれる。燭台は、その書入れ文字によってオランダ渡りの什器なのであろう。

第二巻 (紙本鉛筆、一部色鉛筆 三〇・五×六二七・九センチ)

日のひかる山にしあれど夜

さへて月の光によふもおかしき 芳崖

巻頭このような和歌があつて、最初の図につづく。

第1図 急斜面の尾根をもつ、三角形の外山を中心に山水風景が展がる。画面右上に「七月卅日写」とあり、「外山」を中心に「小倉山道則キリフリ路」「稻荷川」などの書入が画面手前にみられる。

第2図(図版IXb) 大日堂を中心に、背後の山々、堂前の池などが描かれ、こゝでは濃い鉛筆に、藍、緑、茶などの色鉛筆が使用されている。

挿図6 日光地取 第一巻 霜降水遊図 東京芸術大学蔵

「廿九日午後七時十分」の記入があり、第二図を終る筆線のそとに、「廿九日朝中
禪寺行四時半下ル東町帰着」と書入れられる。因みに大日堂は明治三十五、六年の
洪水によって流失している。

第3図 中禅寺湖畔から湖面を大きく望んだ景で、大きい湖面と背景の山々が色
鉛筆をまぜてスケッチされる。「廿九日午後三時三十分」「立木観音ナラブ」「中宮
祠景内」「向湯本」「日光中禅寺」「湖水」などの書入れがある。

第4図 落下する一条の長大な滝が描写され、群れ燕の姿態が数羽スケッチされ
て、「燕数知れず沢山なり」「雨ツバメ」「岩ツバメ」「越後ハ」などの書込がみられ
る。

第5図 この図も、鉛筆に黄土色鉛筆で落下する大滝が描かれる。この辺り滝の
多い地域で、名称記入のない場合その推定も難しい。

第6図 筆線で区切られる方形の内に、この辺り谿間にかゝる各滝の名称が書入
れられる。即ち「上胡水」「左」「此上ケゴン」「アゴンの滝」「右」「般若」「万等」
などとある。「左」「ケゴン」「右」「般若」とは、いろは坂上りに向つての位置を示
すので、中禅寺湖に向つての往路スケッチということになる。

第7図 男体山に連なる山々と、そこにかゝる滝が写生される。「男体山又一
タ荒山」「般若(滝)」「水烟ナリ」「万等(滝)」「屏風岩」「風穴」「五色岩尾云」等
の記入がある。

第8図 「朝日ヶ滝」「み〇見ヨリ登ル廿四丁」とあるのみで図柄はない。

第9図 板橋を描く。

第10図 「相老」の書入れと、幅広の滝が描かれる。

第11図 「白糸」^(生)「裏見」とあり、落下する滝がスケッチされる。

第12図 溪間に懸る数条の滝と、大岩、それをみる人々などが描かれる。「相老
の滝」「裏見の瀑」「白糸の滝」「荒沢(滝)不動尊」などとある。

第13図 「荒沢の滝」

おもてのみよそほへる世をうれたみて

裏もみたらに見する滝かな 貫信

朝露の玉のしるきぞこれやこの

芳崖の写生帳下

うらみか滝の誠にこそある 芳崖

おつる泣か

第14図 「日光山」「赤ナギ山」「外山」「比沙門」「鳴虫山」などとあり、山嶽風
景のスケッチが展開される。

以上六点の写生帳及び画卷は、年代的には天保十一年から歿する前年の明治二十
年にわたつて居り、断続的ながら芳崖における生涯の筆跡をたどることが出来得
る。

専ら父狩野晴皐の指導による修業期の「讚州道記」から、勝川院塾時代の稍自由
な写生の「芳崖翁地取」、或いは南画調筆致で描かれた「真景縮図」、またはフェノ
ロサと知り合つた後の、最晩年における鉛筆、色鉛筆などを使用の「妙義山地取」
のスケッチなど、最後の二点をのぞいては、約十年或いはそれに近い年代の隔りが
ある。

各帖の写生もそれぞれかなり異つた様式を示し、ことに最後の「妙義山地取」「日
光地取」の二点に至つては、狩野派らしい筆跡は全く影をひそめ、迫力ある近代的
写生画が展開されている。

そしてこゝには、封建制の崩壊といふかつてない激動期に、つゞきに辛酸を刮め
ながら新芸術創造に挺身した画人の、激しい精進のあとをしのぶことが出来得よ
う。